

令和7年度特集展示(会期：令和7年7月23日(水)～令和7年10月5日(日))

木簡入門

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 大宰府史跡出土木簡と九州歴史資料館

大宰府史跡では、昭和45年(1970)3月に第1号木簡が発見されて以来、今日までに1200点あまりの古代木簡が出土しています。この点数は九州における出土総数1600点余りのうち、7割以上を占め、大宰府が古代国家の九州統治の拠点であったことを示します。大宰府史跡および大宰府条坊跡等からの出土木簡を数多く所蔵する九州歴史資料館は、大宰府史跡出土資料を中心としながら、九州における木簡研究の拠点として、50年以上にわたって調査研究を行ってきました。

このことをふまえ、特集展示「木簡入門」を開催して、当館の調査研究の主軸の一つである木簡について、そもそも木簡とは何か、その調査研究の方法、保存管理という基礎的な事項について紹介する機会としたいと存じます。

2 木簡とは何か

一般的に木簡は、木の板に墨で文字を書いたものと説明されます。板に文字を書いた資料は、エジプトやローマ、シルクロード周辺の遺跡をはじめ、アフリカ、ユーラシア大陸の各地で発見されています。

文字(漢字)は、鏡の銘文などにより、弥生時代以来、日本列島に伝わりました。木簡を使用することは、朝鮮半島からの渡来人によって、6世紀後半には列島でも始まったようです。具体的には、倭王権が地域支配の拠点として設置したミヤケ(屯倉・官家などと表記される)に、文字を使いこなすことができる渡来人を派遣して、耕作民の名簿を作らせたことが知られます。この名簿は「籍」と記され、『日本書紀』の古い訓には「ナノ札」や「ナフムタ」とあり、木の札であったと考えられます。

最古級の木簡は、奈良県桜井市の厩戸王子(聖徳太子)の上宮かとされる上之宮遺跡や、同市の山田寺下層の溝から出土した643年以前のものなどであり、7世紀後半以降、難波宮や飛鳥の宮都遺跡で多く発見されるようになります。



重要文化財 大宰府跡出土木簡(展示期間：令和7年8月13日(水)～9月28日(日))

3 木簡のかたちと使いみち

木の板に墨で文字を書いたものという説明は、必ずしも木簡の特徴をすべて捉えてはいません。板のほかに、お椀や桶のふたなど、用途が明らかな木製品に文字が書かれたものも、木簡に含まれます。また、文字は書かれていませんが、切り込みを入れて荷札の形にした資料もあります。ゆえに現在、木に文字を書くという行為の文化的、歴史的意義を研究するため、木簡は、①文字を書くために加工したふだ、②文字が書かれた木製品、という2つの方向から定義されます。

木簡には時代を表す数字(5は飛鳥時代、6は奈良時代など)とかたちを表す3桁の数字を組み合わせた4桁の型式番号があります。3桁の数字で、長方形の011・015・019は文書や記録として使われ、切り込みがある031・032・033・039は荷札などに使われ、羽子板に似た041・043・049は封筒として使われました。木簡は、かたちと使いみちに密接な関係があります。文字の内容だけではなく、かたちや出土遺構も含めて総合的に研究することで、初めてその機能を知ることができるのです。

4 木簡の保存管理

木簡は、ほとんどの場合、遺跡の発掘調査で発見されます。古代の人々が木簡を使い終わり、ごみ捨て穴や溝に廃棄した後、土の中に埋まっていたものです。土の中に1300年から1200年も埋まっていたのに、木簡はなぜ腐らずに残っているのでしょうか。

木簡を含めて、木製品が出土するのは、溝や自然の河川、井戸、水田の跡など地下水が豊富な遺構です。土の中の多くの水分が、木製品を酸素から遮断し、木材を腐らせるバクテリアの活動を抑制するため、水分が多い土の中では、木材が残るのです。

土の中に埋まっていた木簡は、木材の細胞中の成分が浸透圧のために多量の水に置き換わった状態であり、そのまま放置すると急激に乾燥して、変形してしまいます。そこで、防腐剤入りの水溶液(濃度0.5%のホウ酸ホウ砂水溶液)に浸けて保存します。水溶液が蒸発したり、汚れたりした場合、水換えをします。木簡の解説や写真撮影など調査研究を十分に行った後、

木材の中の水分を安定した物質に置換する保存処置を行います。

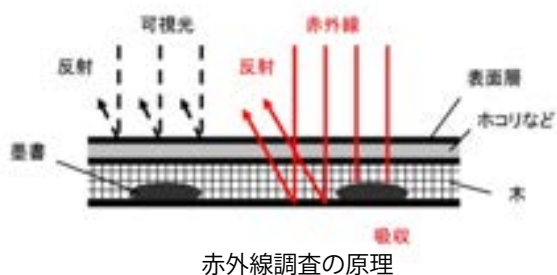
5 木簡の調査研究

木簡の内容は、歴史書など後世の編纂史料と違って、文字が書かれた当時の生の記録です。1960年代以降、飛鳥や平城宮・京跡、難波宮跡などの宮都を始め、全国で発掘調査で木簡が出土するようになり、古代社会の実態解明に大きな役割をはたしました。

木簡の内容は断片的です。このため、出土した遺跡や遺構、ほかの出土遺物とともに、木簡じたいの加工や形状ともあわせて、用途を総合的に研究することで、その情報を最大限に引き出す必要があります。文字は出土直後が最もよく観察できるので、なるべく早く調査事務所など屋内に運び、洗浄の上、墨痕の記録(記帳と呼びます。文字解読のため、筆順に留意しながらスケッチします。形状や大きさ、加工痕跡等を正確に記録する実測とは別の記録方法)や写真撮影を行います。

墨痕がかすれて読みにくい場合は、赤外線カメラによる観察も併用します。赤外線は可視光線より波長が長く、炭素に吸収されやすい特徴があり、木材の内部にわずかに残る墨痕を肉眼よりも鮮明に検知できるのです。

(学芸調査室 酒井芳司)



赤外線調査の原理



赤外線カメラの調査風景



編集

発行: 令和7年7月23日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <https://kyureki.jp/>